

「北海道養成苗」利用によるイチゴ育苗の省力化

近藤弘志・小早川弘文

イチゴの促成栽培において、育苗の省力化を図るため、北海道の畑作農家に苗生産を委託する試みが行われている。本試験では、北海道で養成された苗の本県での生産力を調査するとともに、定植時期が定植準備の遅れ、または掘り上げ時期の遅れによって遅延された場合の影響について調査した。

1. 北海道養成苗は、慣行のポット苗に比べ収穫開始時期が 1 週間程度遅れた。しかし 4 月末までの総収量はやや多く、生産力は高いと推察された。
2. 北海道養成苗は到着時には花芽分化が不ぞろいであり、これを 3 週間、5°C で冷蔵した場合、開花、収穫開始時期が大幅に遅れ、収量も少なく、実用性が低いと推察された。
3. 掘り取り時期が予定の 9 月上旬から 9 月下旬に遅れた場合、到着後すぐに定植すれば、収穫開始時期がやや遅れるものの、総収量はほぼ同程度で、果形が改善される傾向がみられ、悪影響は小さいと思われた。

キーワード:育苗,イチゴ,省力化,女峰,北海道